

令和2年度
文化庁日本語教育大会(WEB大会)

文化審議会国語分科会 日本語教育小委員会の審議状況の説明



Japanese Language Education

報告者

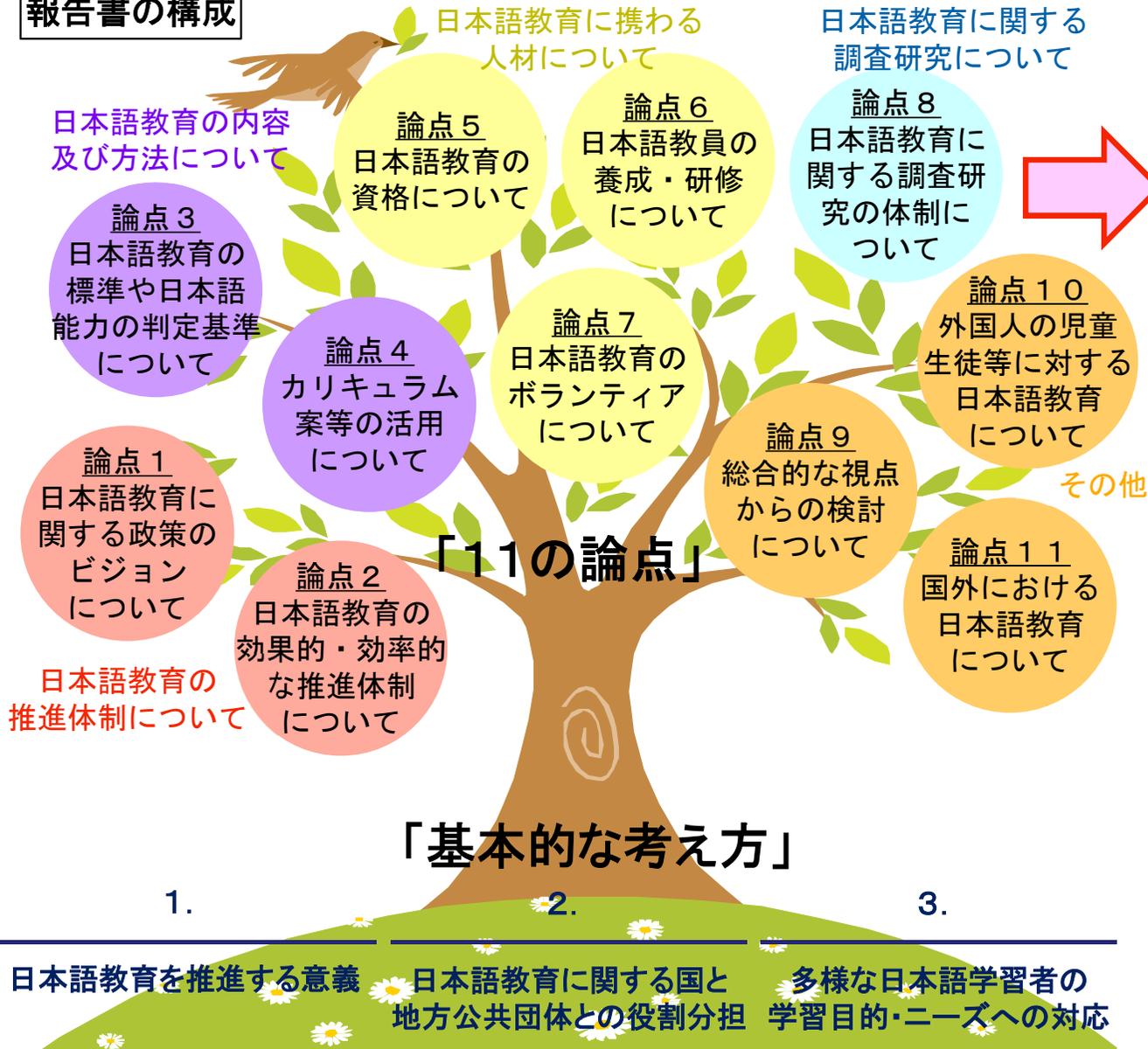
石井 恵理子(いしい えりこ)

(文化審議会国語分科会 日本語教育小委員会 主査)

文化審議会国語分科会日本語教育小委員会における審議について

○文化審議会国語分科会日本語教育小委員会(平成19年7月設置)では、平成24年5月28日に日本語教育小委員会に「課題整理に関するワーキンググループ」を設置。日本語教育を推進する意義等について再確認するための検討を行い、改めて「基本的な考え方」を整理。その上で、今後、具体的な施策の方向性や日本語教育の推進方策を議論していく際の「検討材料」として「11の論点」を整理。

報告書の構成



これまでの検討状況

平成26年1月31日
「日本語教育の推進に当たっての主な論点に関する意見の整理について(報告)」

平成28年5月から、
論点5「日本語教育の資格について」
論点6「日本語教員の養成・研修について」審議を行い、
平成30年3月2日に
「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」
を取りまとめ。平成31年3月4日に改定版を作成。

令和2年3月10日に
「日本語教師の資格の在り方について(報告)」
を取りまとめた。

令和2年11月20日に
「日本語教育の参照枠」一次報告」
を取りまとめた。

今期の審議予定

論点3「日本語教育の標準や日本語能力の判定基準について」引き続き、検討。
論点4「カリキュラム案等の活用について」改定に向けた検討を開始。

「日本語教育の参照枠」一次報告概要

「日本語教育の参照枠」とは

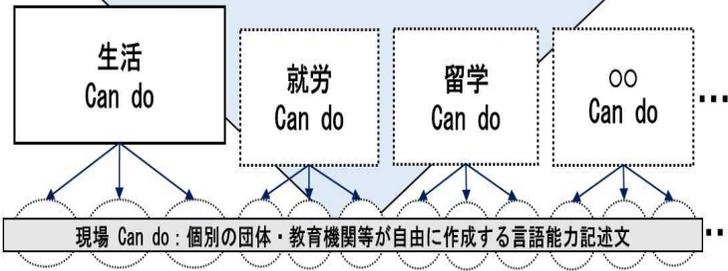
CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）*を参考に，日本語の習得段階に応じて求められる日本語教育の内容・方法を明らかにし，外国人等が適切な日本語教育を継続的に受けられるようにするため，日本語教育に関わる全ての者が参照できる日本語学習，教授，評価のための枠組み

「日本語教育の参照枠」一次報告の構成

「日本語教育の参照枠」として示す範囲



分野別の言語能力記述文 (Can do)



*CEFRとは

ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR: Common European Framework of Reference for Languages）は，欧州評議会によって，20年以上にわたる研究と検証の末に開発され，2001年に公開された。現在では40もの言語で翻訳されている。また，CEFRは言語資格を承認する根拠にもなるため，国境や言語の枠を越えて，教育や就労の流動性を促進することにも役立っている。

全体的な尺度（抜粋）

日本語能力の熟達度について6レベルで示したもの

熟達した言語使用者	自立した言語使用者	基礎段階の言語使用者
C2	B2	A2
C1	B1	A1

C2: 聞いたり，読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。自然に，流ちょうかつ正確に自己表現ができ，非常に複雑な状況でも細かい意味の違い，区別を表現できる。
C1: いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ，含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに，流ちょうに，また自然に自己表現ができる。社会的，学問的，職業上の目的に応じた，柔軟な，しかも効果的な言葉遣いができる。
B2: 自分の専門分野の技術的な議論も含めて，具体的な話題でも抽象的な話題でも複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで熟達した日本語話者とやり取りができるくらい流ちょうかつ自然である。
B1: 仕事，学校，娯楽でふだん出会うような身近な話題について，共通語による話し方であれば，主要点を理解できる。身近で個人的にも関心のある話題について，単純な方法で結び付けられた，脈絡のあるテキストを作ることができる。
A2: ごく基本的な個人情報や家族情報，買い物，近所，仕事など，直接的関係がある領域に関する，よく使われる文や表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら，身近で日常の事柄についての情報交換に応じることができる。
A1: 具体的な欲求を満足させるための，よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し，用いることもできる。もし，相手がゆっくり，はっきりと話して，助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。

*各レベルについての説明は，CEFR日本語版（追補版）の訳文を基にし，CEFR補遺版を参考に一部修正を加えた。

目指すもの

1 学習者を社会的存在として捉える

2 言語を使って「できること」に注目する

3 多様な日本語使用を尊重する

5つの言語活動

（言語活動別の熟達度を示す）

聞くこと

読むこと

話すこと
（やりとり）

話すこと
（発表）

書くこと

期待される効果

- 生活・就労・留学等の分野別の能力記述文（Can do）が開発され，具体的かつ効果的な教育・評価が可能になる。
- 日本語能力が求められる様々な分野で共通の指標による評価が可能となり，国内外の試験間の通用性が高まる。
- 国や教育機関を移動しても適切な日本語教育を継続して受けられることができる。

図2: 口頭能力が高い日本語学習者の日本語熟達度(例)

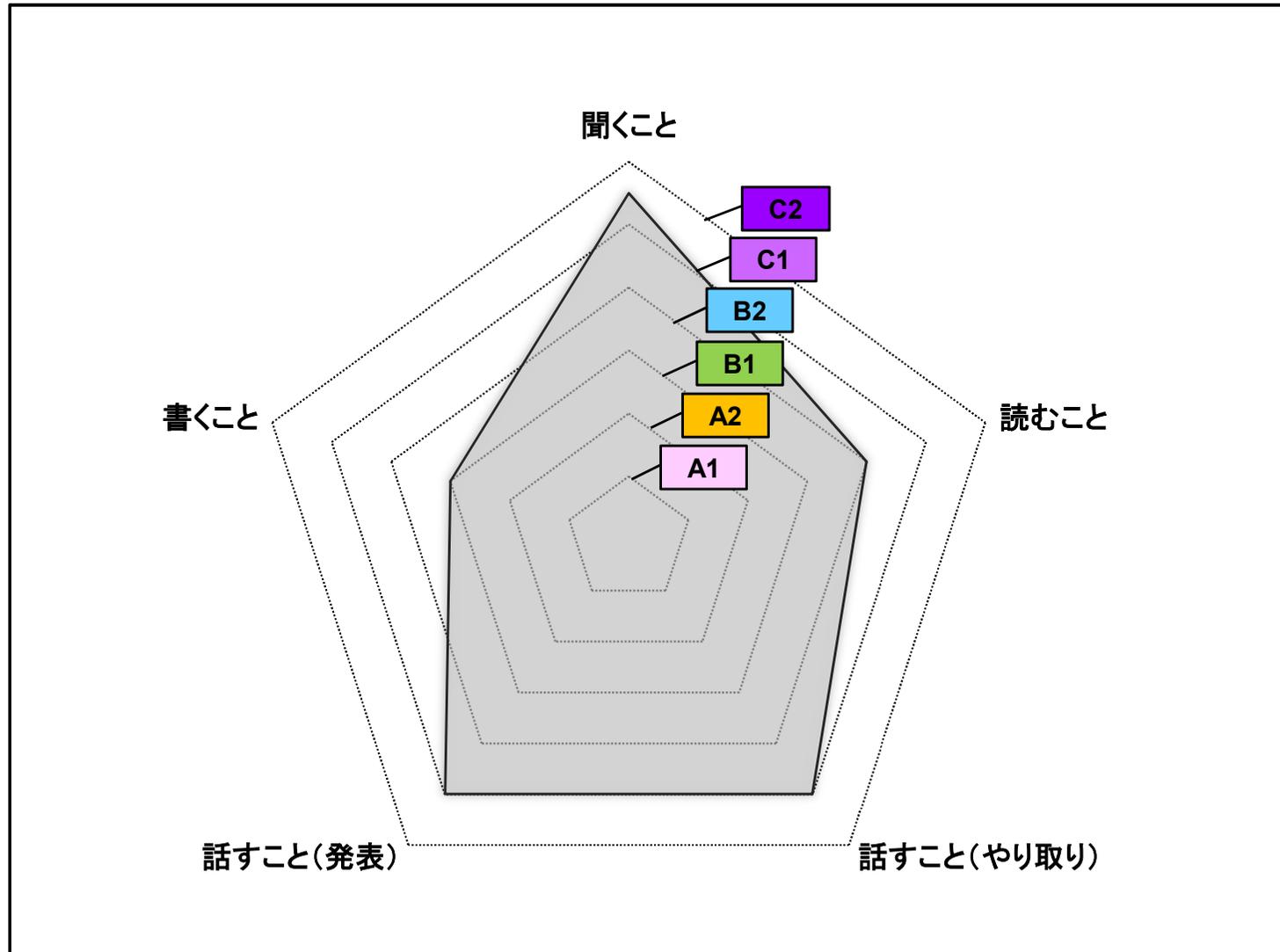


図3: 読み書き能力が高い日本語学習者の日本語熟達度(例)

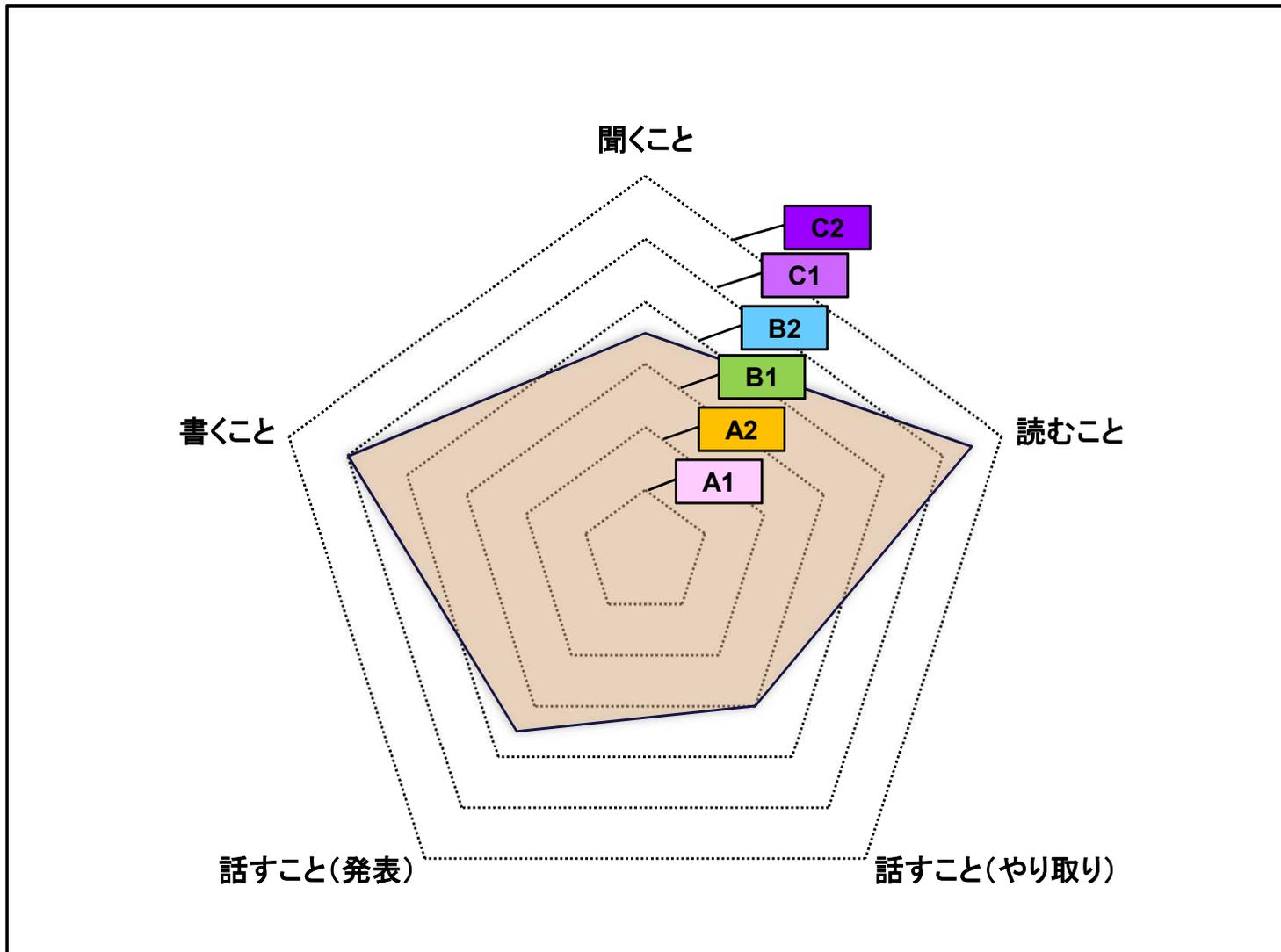


図4：「日本語教育の参照枠」における日本語の熟達度，「話すこと（やり取り）」場合

